

ジョージア (グルジア) 便り その30

『チェリーブロッサムとレロの闘い!?!』

文 高野陽年 text by Yonen Takano



代表団は敬愛の念を込めてレロと呼ばれる。レロは欧州の強豪国の一つに数えられ、多くの選手がフランスなどのトップリーグで活躍しているのだ。レロの愛称はジョージアに古くから伝わる球技に由縁する。レロ

劇場の朝の稽古に間に合うよう、トビリシの目抜き通りであるルスタヴェリ通りを小走りに急いでいると、「JAPAN」の文字が目に入った。しかも一つや二つではない。それはトビリシを走る車の大半を占める日本の中古車のマークでもなければ、アジア料理屋の看板でもない。

「JAPAN」の主は高級外資系ホテルの玄関からぞくぞくと現れた。僕の三倍はあるかという体格の男達。桜のエンブレムが入ったジャージを着たラグビー日本代表団のようだった。ジョージアとのテストマッチのためトビリシ入りしたようだ。

ジョージアの国技といえばレスリングや柔道などの格闘技とラグビーが挙げられる。特にラグビー代表の一挙手一投足は常に国民の話題となっている。日本チームがチェリーブロッサムズと呼ばれるようにジョージアラグビー

ブッテイと呼ばれるこの球技は村を代表する男達が原っぱのうえでボールを奪い合う原始的なスポーツで、ラグビーに通ずるものがある。勝利した村にはその年の恵みある収穫が約束されると信じられていて、いわば奉納祭的なスポーツイベントだ。レロブッテイは常に民の周りで育まれてきた。現に劇場の子供用レパートリーの一部でこの伝統的スポーツをモチーフにしたバレエも作られている。歴史も古く、既に12世紀の文献にこのスポーツは登場していて、人々の血に脈々とこの伝統が息づいているからこそ、少ない競技人口ながらも堂々とした戦績をレロは誇っているのだろう。

このレロとチェリーブロッサムズがトビリシで行う試合。見逃すわけにはいかなく日本人の友人を誘ってスタジアムへと赴いた。スタジアムには劇場の連中も駆けつけていたが、今回ばかりは仲良く応援というわけにはいかなかった。トビリシのスタジアムは完全にアウエーで、お世辞にも行儀のいい観客達とは言えない。客席でタバコは吸うわ、食べ物はい散らかすわ、彼らにとってはスタジアムも原っぱも一緒なのだろう。肉眼では日本応援団を確認することはできず、ジョージアチームにボールが渡る度にうねるような歓声が湧く。その圧倒的な威圧感に

僕らは完全に萎縮してしまった。そんな中突然大きな日本の国旗が客席に広げられた。スタジアムのスクリーンも彼らを捉える。そこには鉢巻を巻いた熱心なジャパンチームの応援団が遠路はるばる応援に来ていたのだ。僕らにも仲間がいるということだ。僕らにも仲間がいるということだ。勇気付けられ、声を枯らすほど声援を送った。周りのジョージア人は僕らの光景が異様に見えたにちがいない。

結果、僕らの応援が功を奏したかはわからないが、チェリーブロッサムズがこのトビリシでレロを破ることができた。次の日、劇場で僕ほどだけ鼻高々であったか。会う人すべてに試合の結果を伝えてあげたのだが、皆の悔しそうな顔を忘れることができない。

Profile

2011年にロシアの名門ワガノワバレエアカデミーを卒業し、世界的振付家ナチョ・ドゥアトの指名を受け外国人初の正団員としてロシア国立ミハイロフスキー劇場に入団。主にドゥアト作品で活躍した後、2014年6月より世界的に絶大な人気を誇るバレリーナ、ニーナ・アナニアシヴィリに引き抜かれグルジア国立トビリシ・オペラ・バレエ劇場に移籍。現在はその団の主要なダンサーとして国内外の公演で劇場を牽引している。立教大学中退。

